

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 松本卓也

【所属】(助成決定時) 自治医科大学大学院

## 【研究題目】

自閉症をめぐる文化比較研究——フランスと日本の比較から

## 【研究の目的】(400字程度)

近年、自閉症の病態解明の進歩と歩調を合わせるように、教育的・行動療法的アプローチからの自閉症の治療実践が盛んに行われるようになった。一方、以前から存在していた自閉症に関する治療実践が、エヴィデンスに乏しいものとして批判される場面がみられる。例えば、フランスでは、精神分析家ジャック・ラカンの強い影響下にある精神分析家たちによって、独特の理論と治療実践が出来上がっていた。しかし、それらの理論と実践は、近年、強い批判にさらされるようになった。今後、我が国でも旧来の治療的アプローチと教育的・行動療法的アプローチとの覇権争いが本格化する可能性があるといえる。そこで本研究では、フランスの自閉症の治療文化における諸問題を、我が国における自閉症の治療文化と比較することによって、グローバル化する精神医学における治療文化間の国際相互理解に寄与することを目的とする。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

筆者は、2012年にフランス人精神科医と共に、フランスの自閉症の治療文化に関する原著論文を発表した。この論文のなかでは、2011年にフランスで生じた、自閉症患者団体による精神分析療法とパッキング療法に対するから厳しい批判を紹介するとともに、その批判の対象となった精神分析やパッキング療法の理論と実践の歴史と意義についての考察を行った。

本研究は、上記の研究をより深める形で行われた。まず、フランスと日本における自閉症の理解と治療実践に関する学説史を文献的研究によって整理することを行った。フランスに関しては、L'Information Psychiatrique 誌、Annales Médico-psychologiques 誌などの精神医学系の雑誌、および Revue française de psychanalyse 誌、La Cause Freudienne (La Cause du désir) 誌、Quarto 誌などの精神分析系の雑誌とフランス語で書かれた自閉症論のモノグラフ、さらにはフランス語圏の臨床実践の影響を受けて活動している英国の臨床家の雑誌である、Psychoanalytical Notebook や Hurly-Burly などの雑誌を中心に、1950年～2013年までの自閉症に関する論文を体系的に整理した。日本に関しては、『精神神経学雑誌』、『精神医学』誌などを中心に、自閉症に関する論文とモノグラフを読み込んだ。この作業によって、フランスにおける独特の自閉症理解を明らかにし、日本との相違点についても明らかにすることができた。

ついで、文献的研究から明らかになった諸論点を、より具体的に把握するために、フランスでの精神分析家による自閉症臨床をよく知る国内の精神分析家、臨床心理士に口頭、および書面での聞き取り調査を行った。さらに、日本で民間病院に勤務する医師にも、同様の聞き取り調査を行った。

## 【結論・考察】(400字程度)

日本における一般的な精神科医にとっては、自閉症は脳機能の異常を伴う疾患である。しかし、病的な異常が特定されたといっても、癌を手術で取り除くように自閉症の異常を取り除くことはできない。そのため、彼らもつ奇抜な特徴を活かしながら、どのように社会の中でうまくやっていくことができるかが重要になる。フランスの精神分析では、自閉症は、言語の獲得に際して防衛を行う主体と考えられる。その理論と実践は、彼らの個性を活かしながら、いかにして彼らが言語に対して身を開いた存在になるのかを問い直すものであった。この点では、治療文化は異なれど、両者は共通の部分を含む。しかし、理論的前提において両者は大きく異なる。自閉症の治療文化を考えるためには、私たちがどのような人間を「自閉症」として名指し、その個人と家族に対してどのように働きかけるのか、そして自閉症という病理が社会に対してどのような意味をもつのか、という観点から自閉症を考察することが必要である。